

Relations—Page 2 27×37cm 1986

1963 鹿児島県名瀬市生まれ
1985 琉球大学教育学部美術工芸科卒業
1985.4月—87.3月 研究生

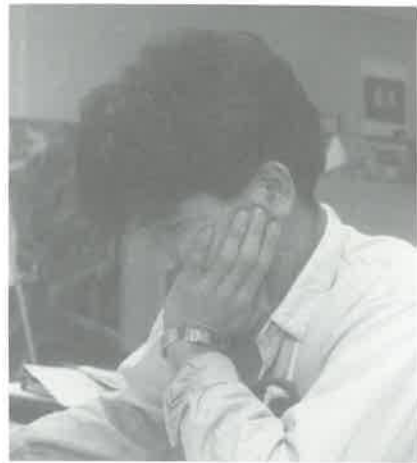
原植物の図鑑

永津 禎三

中田久男はモチーフとして耳と植物をよく扱う。感覚器官である耳の形態はそれ自体、不思議で興味深い形なのだが、植物の各器官である花や葉と相似であるともいえる。彼は外界へ開かれた、音に対する鋭敏な形態を植物にあてはめる。

中田の絵画はこの一年の間に、一つのタブローから、本の一頁のごとくに変化してきている。以前タブローの中で絵画的空間を構築していく決定的な要素であった前述のさまざまな形態は、一つの図形として扱われているように見える。加えて、意味ありげに、頭文字や英文、矢印等が描きこまれる。記号や文字は特に意味をもたないため、表・裏が明白なもの、つまり表面に描かれた世界であることを強調する。

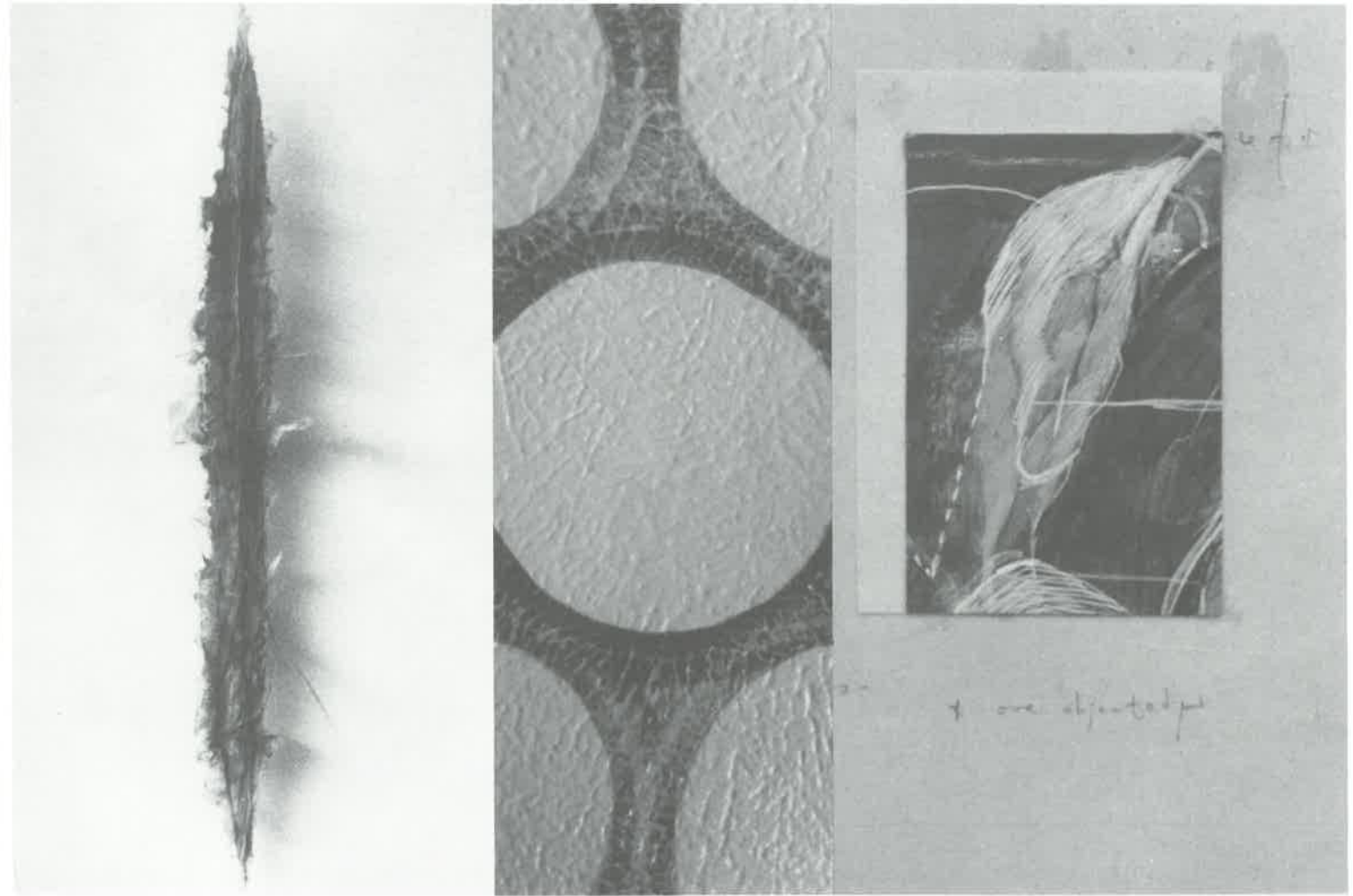
そのいくらか古色を帯びた一頁一頁は、内的世界で咲きそろう原植物の図鑑のように、彼自身のコスモスを図解し、我々に提示するかのようである。



87企画—2 86年度 琉球大学教育学部美術工芸科研究生展

- Vol. 1 仲間 伸 恵 展 2月3日㊦—2月22日㊦
- Vol. 2 田 里 博 展 2月24日㊦—3月15日㊦
- Vol. 3 中 田 久 男 展 3月17日㊦—4月5日㊦

GALLERY TAKUMI



仲間伸恵



シュシA 29×40cm 1987

1963 沖縄県平良市生まれ
1986 琉球大学教育学部美術工芸科卒業
1986 三人展“表面から物質へ”画廊沖縄
1986.4月—87.3月 研究生



紙と語る

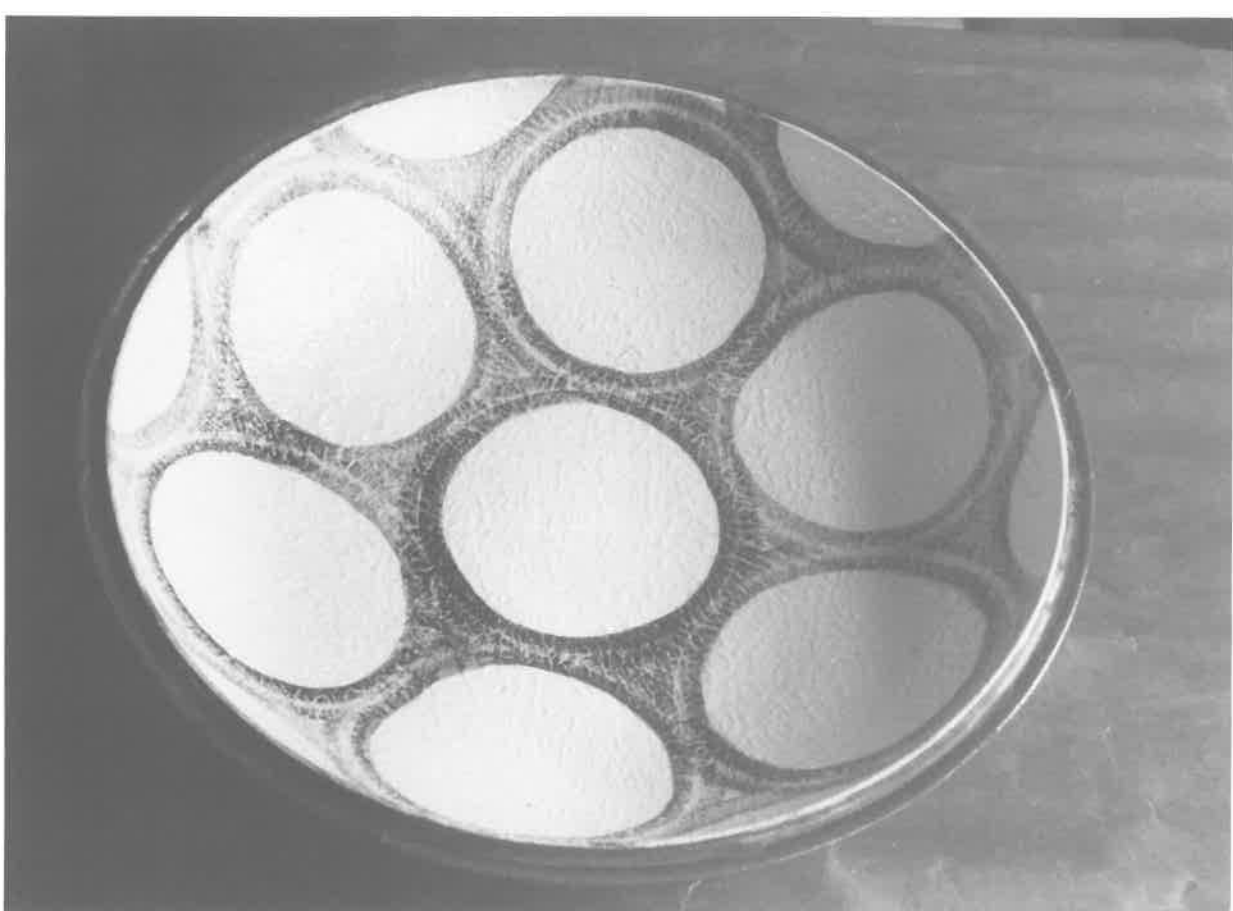
永津 禎三

紙そのもの、特に和紙を使った芸術が注目されたのは、1983年の京都、紙会議あたりからである。その参加者の一人である、グリーンウォールドや、85年に琉球放送ホールで講演した、マリー・ライマンの相次ぐ来沖と講演が直接、仲間伸恵の仕事を決定づける動機となった。

仲間は和紙やその他の紙を裂き、ほぐし、水につけて繊維状にしたものを、もう一度仲間自身のオリジナルな紙として再生する。紙は時に植物染料で染められ、土により着色される。

仲間は紙の扱いに独特な感性を有しているようだ。紙の物質性を前面に出しているのだが、扱われるそれぞれの紙の中にある、歴史性、風土性と対話しているかのようである。言葉を替えれば、紙のもつ神聖を敏感に感じとっている。自分の側に強引に紙を材料としてもってくるのではなく、引き寄せられるように、さまざまな紙と語りあう。作品をつくりながら、仲間自身の立脚点を確かめるように。

田里博



丸紋皿 径31.5 高9.0cm 1987

1963 沖縄県糸満市生まれ
1985 陶二人展 画廊宝（那覇市）
1986 琉球大学教育学部美術工芸科卒業
1986 現代沖縄陶芸展奨励賞
1986.4月—87.3月 研究生



清々として

奥田 実

田里博の飛鉦は端正である。染付も几帳面なら、釉裏紅も生真面目、勿論器形に崩れたところは無い。生硬だが、初々しい印象を与える。それが、多彩な古今の作品を見慣れた眼には、少々物足りなく映るかも知れない。所謂“味”に欠けるのである。然し、それも若さ故の潔癖さから、意識して“味”を排しているのなら、今暫くはその気持を大切にしたい。何故なら、時間と経験は狎れを生み、狎れは否応無く作品に“味”を加えるものであるから。もし彼の気持がそうでないのなら、時には“味”にも思いを回らせて欲しい。決して茶陶の真似をする事ではない。意識の片隅に潜む天の邪鬼の声に耳を傾けるだけで良い。常道を見失い、セオリーを忘れろと囁いている筈だから。

何はともあれ、新しい技法と素材は、彼の感性を揺振り続けたに違いない。その一つの答が今日の作品群である。奇を衒わないその清々しい作品が、大方の好感を持って迎えられる事を信じて疑わない。